

A Study on Human Resource Development through SDGs in School Education

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2020-07-28 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 荒木, 貴之, 西田, 浩之, 保坂, 朗子, 林, 昂平 メールアドレス: 所属:
URL	https://mu.repo.nii.ac.jp/records/1317

学校教育における SDGs を通した 人材育成に関する考察

A Study on Human Resource Development through SDGs in School Education

荒木 貴之*
ARAKI Takayuki

西田 浩之†
NISHIDA Hiroyuki

保坂 朗子†
HOSAKA Akiko

林 昂平†
HAYASHI Kohei

はじめに

2015年9月、国連総会において全会一致により、SDGs (Sustainable Development Goals: 持続可能な開発目標) が採択された。SDGs に先立つアクションとしては、MDGs (Millennium Development Goals: ミレニアム開発目標) があったが、この MDGs が主として開発途上国を対象とするものであることに対して、SDGs はすべての国と地域が対象となる点において違いがある。

SDGs は、17のゴールおよび169のターゲットで構成される(図1および表1)。17のゴールのうち、11のゴール(3, 4, 5, 8, 9, 10, 11, 12, 13, 16 and 17)については、世界的な大学評価ランキングである Times Higher Education のインパクトランキングの指標ともなっており、今後各大学においては、SDGs への取り組みがより推進されるであろうことが予想される。

SUSTAINABLE DEVELOPMENT GOALS



図1 SDGs アイコン (外務省 JAPAN SDGs Action Platform から引用)

* 武蔵野大学教育学部 † 武蔵野大学附属千代田高等学校

表1 SDGs (持続可能な開発目標；外務省仮訳から引用)

- | |
|---|
| 目標 1. あらゆる場所のあらゆる形態の貧困を終わらせる |
| 目標 2. 飢餓を終わらせ、食料安全保障及び栄養改善を実現し、持続可能な農業を促進する |
| 目標 3. あらゆる年齢のすべての人々の健康的な生活を確保し、福祉を促進する |
| 目標 4. すべての人に包摂的かつ公正な質の高い教育を確保し、生涯学習の機会を促進する |
| 目標 5. ジェンダー平等を達成し、すべての女性及び女児の能力強化を行う |
| 目標 6. すべての人々の水と衛生の利用可能性と持続可能な管理を確保する |
| 目標 7. すべての人々の、安価かつ信頼できる持続可能な近代的エネルギーへのアクセスを確保する |
| 目標 8. 包摂的かつ持続可能な経済成長及びすべての人々の完全かつ生産的な雇用と働きがいのある人間らしい雇用 (ディーセント・ワーク) を促進する |
| 目標 9. 強靱 (レジリエント) なインフラ構築、包摂的かつ持続可能な産業化の促進及びイノベーションの推進を図る |
| 目標 10. 各国内及び各国間の不平等を是正する |
| 目標 11. 包摂的で安全かつ強靱 (レジリエント) で持続可能な都市及び人間居住を実現する |
| 目標 12. 持続可能な生産消費形態を確保する |
| 目標 13. 気候変動及びその影響を軽減するための緊急対策を講じる |
| 目標 14. 持続可能な開発のために海洋・海洋資源を保全し、持続可能な形で利用する |
| 目標 15. 陸域生態系の保護、回復、持続可能な利用の推進、持続可能な森林の経営、砂漠化への対処、ならびに土地の劣化の阻止・回復及び生物多様性の損失を阻止する |
| 目標 16. 持続可能な開発のための平和で包摂的な社会を促進し、すべての人々に司法へのアクセスを提供し、あらゆるレベルにおいて効果的で説明責任のある包摂的な制度を構築する |
| 目標 17. 持続可能な開発のための実施手段を強化し、グローバル・パートナーシップを活性化する |

SDGsの17のゴールの中で、教育機関に直接的な関連があるのはSDGs4「すべての人に包摂的かつ公正な質の高い教育を確保し、生涯学習の機会を促進する」である。このSDGs4には、さらに10の具体的なターゲットが示されている(表2)。武蔵野大学附属千代田高等学院では、SDGsが掲げる「No one will be left behind. (誰一人として取り残さない)」という理念に共感し、全校の生徒を対象としたSDGsの理解と実践を進めているが、これはSDGs4.7「2030年までに、持続可能な開発のための教育及び持続可能なライフスタイル、人権、男女の平等、平和及び非暴力的文化の推進、グローバル・シチズンシップ、文化多様性と文化の持続可能な開発への貢献の理解の教育を通して、全ての学習者が、持続可能な開発を促進するために必要な知識及び技能を習得できるようにする。」に基づくものである。

表2 SDGs4の10のターゲット（外務省仮訳から引用）

- 4.1 2030年までに、すべての子どもが男女の区別なく、適切かつ効果的な学習成果をもたらす、無償かつ公正で質の高い初等教育及び中等教育を修了できるようにする。
- 4.2 2030年までに、すべての子どもが男女の区別なく、質の高い乳幼児の発達・ケア及び就学前教育にアクセスすることにより、初等教育を受ける準備が整うようにする。
- 4.3 2030年までに、すべての人々が男女の区別なく、手の届く質の高い技術教育・職業教育及び大学を含む高等教育への平等なアクセスを得られるようにする。
- 4.4 2030年までに、技術的・職業的スキルなど、雇用、働きがいのある人間らしい仕事及び起業に必要な技能を備えた若者と成人の割合を大幅に増加させる。
- 4.5 2030年までに、教育におけるジェンダー格差を無くし、障害者、先住民及び脆弱な立場にある子どもなど、脆弱層があらゆるレベルの教育や職業訓練に平等にアクセスできるようにする。
- 4.6 2030年までに、すべての若者及び大多数（男女ともに）の成人が、読み書き能力及び基本的計算能力を身に付けられるようにする。
- 4.7 2030年までに、持続可能な開発のための教育及び持続可能なライフスタイル、人権、男女の平等、平和及び非暴力的文化の推進、グローバル・シチズンシップ、文化多様性と文化の持続可能な開発への貢献の理解の教育を通して、全ての学習者が、持続可能な開発を促進するために必要な知識及び技能を習得できるようにする。
- 4.a 子ども、障害及びジェンダーに配慮した教育施設を構築・改良し、すべての人々に安全で非暴力的、包摂的、効果的な学習環境を提供できるようにする。
- 4.b 2020年までに、開発途上国、特に後発開発途上国及び小島嶼開発途上国、ならびにアフリカ諸国を対象とした、職業訓練、情報通信技術（ICT）、技術・工学・科学プログラムなど、先進国及びその他の開発途上国における高等教育の奨学金の件数を全世界で大幅に増加させる。
- 4.c 2030年までに、開発途上国、特に後発開発途上国及び小島嶼開発途上国における教員研修のための国際協力などを通じて、質の高い教員の数を大幅に増加させる。

武蔵野大学附属千代田高等学院においては、2017年11月に国連事務総長に対して、国連グローバル・コンパクト（以下、UNGC）への署名申請を行い、同年12月に加盟が認められた。UNGCが設置された背景には、経済がグローバル化する中、富の不平等が深刻化し、それに起因する紛争・貧困が発生する中で、世界的に格差が拡大していく懸念があり、1999年に当時の国連事務総長であったコフィー・アナンがダボス会議で提唱したことに端を発する。翌2000年に、国連本部においてUNGCは正式に発足したが、特徴としては、「国連が『国家』という旧来の仕組みではなく、民間企業／団体の主体的なイニシアチブ（取り組み・参画／関与）を求めてきた」とことと「一方、企業の側もグローバル化・多国籍企業化・社会的存在感の増大につれ、従来は公権力領域であったグローバル課題への関心・関与意欲が高まる」ことが挙げられる。

我が国では、2001年3月にキッコーマン株式会社がUNGCへの署名を果たし、2003年12月には加盟者による「ジャパン・ネットワーク」が設立され、2011年10月の一般社団法人化を経て、

2015年7月には「グローバル・コンパクト・ネットワーク・ジャパン」(以下,GCNJ)が結成された。GCNJは、2019年11月13日現在、正会員として341の企業・団体で構成され、その中で学術団体として、ヴィアートル学園洛星中学校高等学校、関西学院大学、国際基督教大学、同志社大学、同志社女子大学、明治学院大学、上智大学、成蹊大学、大阪府立千里高等学校、筑波大学、聖学院、国際学院、相愛学園相愛中学校高等学校、夕陽丘学園および武蔵野大学附属千代田高等学院の15の学校が所属している。また、GCNJはいくつかの分科会により構成されるが、武蔵野大学附属千代田高等学院は、「SDGs分科会」の幹事として、「教育とSDGs」と題した講演会の開催や、「SDGs分科会」参加企業への提案や助言など、企業と学校とのパートナーシップを推進する取り組みを行ってきた。

学校がSDGsに取り組むことについて、小村・金井(2018)は、OECD(経済協力開発機構)が2015年に定めた「OECD Future of Education and Skills 2030(教育スキルの未来;以下、OECD Education 2030)」を踏まえつつ、「日本の学校ではSDGsを意識した学習活動の展開や、SDGsのような人類共通の課題に取り組むプロジェクト学習(Project-based Learning)が増えつつある」ことを指摘している。

本稿では、SDGs4.7の観点から、武蔵野大学附属千代田高等学院で取り組まれるSDGsに関連したプロジェクト学習ならびに効果的な教育手法の開発について取りまとめることを通して、SDGsを通した人材育成に関して、考察を加えることとする。

1. プロジェクト学習1「企業との連携」(保坂朗子)

1.1 テーマ

「女子高校生、企業人になる!!~地球にやさしく、みんなを笑顔に!~」

1.2 達成目標 (SDGsゴールについては、SDGsアイコンで示された簡便な表記とする)

SDGs4「質の高い教育をみんなに」

SDGs12「つくる責任、かう責任」

SDGs17「パートナーシップで目標を達成しよう」

学校は、具体的な目標として、以下の4つの目標を設定した。

- (1) 浅草九重からのミッションを自らの力で達成し、客様(浅草九重)のニーズに答える。
- (2) ビジネスを実体験し、会貢献を含む部活動を自分達の手で持続可能なものにする。
- (3) 浅草仲見世通りの他のお店とのコミュニケーションがとれるようにする。
- (4) 商品企画開発において、学校や地域の人の意見を取り入れ消費者市民社会の一員という意識を持つ。

1.3 テーマ設定の理由

武蔵野大学附属千代田高等学院・千代田女学園中学校クッキング部は、創部30年を超える伝統ある部活です。時代と共に部活の取り組みも変化をとげてきました。近年の部員は部費(材料費)を自分のお小遣いから出す生徒も多く、その資金を自らの手で捻出できないかと生徒からの意見

が多数ありました。

クッキング部は料理，お菓子を作り，食べた人が「美味しい！！」と笑顔になってくれることを望み日々活動をしています。その笑顔を家族や仲間だけでなく，より多くの人々に届けたいと願っています。その為のレシピ開発において，資金は大変重要です。

この度，浅草九重様のご協力を得て，環境にやさしい，皆が笑顔になる商品開発をし，その利益を部活の活動費に還元して頂けることになりました。生徒一人ひとりが大人社会の真似事ではなく，ビジネスを実体験できる機会となりました。

経済学，環境学，栄養学と多方面からのアプローチも考え，生徒一人ひとりが企業人として自分の取り組みに責任を持ち最後まで，やり抜きます。そして，自分の作ったものを他者から評価をされ持続可能な取り組みになるように進めていくプロジェクトです。

1.4 運営体制

1.4.1 協力企業および協力者

浅草九重（台東区浅草 2-3-1）女将 小林久美子氏

浅草寺から三軒目。あげまんじゅうの実演販売のお店。

原料にこだわり，多くの種類のあげまんじゅうをとり揃え，大人気のお店。

1.4.2 武蔵野大学附属千代田高等学院クッキング部（部員数 28 名）

顧問 保坂朗子教諭・佐藤陽子教諭

1.5 経過

	2019 7月	8月	9月	10月	11月	12月	2020 1月	2月	3月
浅草九重(小林様)プレゼン&顔合わせ	7/12(金)								
浅草九重での販売・調理体験&フィールドリサーチ	7/31(水)								
浅草九重での販売・調理体験&フィールドリサーチ		8/1(木)							
文化祭(藤華祭)での販売品目選定及び決定	→								
文化祭(藤華祭)での販売準備、販売第1弾！！		→ 藤華祭 9/29(土)30(日)							
校内生徒へのアンケートを実施				→					
藤華祭での利益を元に新商品を試作					→ 新商品プレゼン大会 開催！！				
食品営業許可申請(千代田区保健所)				→					
Café Chiyoda OPEN！！新商品試食会(地域の方や日頃お世話になっている方をご招待) 12月or1月※アンケート実施							→ Café Chiyoda		
新商品完成、販売開始！！振り返り&販売利益を元に第2弾新商品の開発及び活動の検証(活動の拡大)				→					∞ 無限大！！

図 2 企業と学校との協働スケジュール

1.5.1 企業（浅草九重）から学校への依頼

- (1) 食品ロスになっている食べられる食品資源（揚げ玉）を再利用した新商品の開発
- (2) 宗教食やベジタリアンに対応した新商品の開発
- (3) 修学旅行の学生に適した新商品の開発

1.5.2 学校（クッキング部）から企業への提案

- (1) 揚げ玉を利用した新商品『あんこクラッチ（部員のアイデア）』
- (2) あげまんじゅうの新商品『多数のアイデアが部員より』
- (3) ベジタリアン対応の新商品『卵なしの揚げ衣の開発、あげまんじゅう以外の商品の開発』
- (4) 修学旅行生向けの新パッケージ『デザイン担当（部員）より提案』
- (5) あげまんじゅうの栄養学的価値を示すチラシの作成『身体にやさしい点を栄養学的に宣伝』
- (6) 接客マニュアル（英語版）の作成『実用的なものを、部員が作成』
- (7) 若さと元気の提供！！『どんな時でも笑顔とパワーを多くの方へ届ける』

1.5.3 企業（浅草九重）訪問および仲見世フィールドリサーチ

以下に、2019年7月31日および8月1日に行った企業訪問および仲見世フィールドリサーチの結果を示す（図3）。

	コミュニケーション	フィジカル	心理的	スキル	アイデア	他店での気づき
★ 部員 の 気づき ★ 抜粋	やりがい	体力	楽しい	技術(コツ)	アイスのせ	実演販売！！
	明るさ	大変	根性	スピード	タピオカ	焼きたて！！
	笑顔	暑い	優しい		五輪饅頭	差別化
	目を見て	夏は大変			あんこクラッチ	日陰
	言葉遣い				しそ梅	食べるスペース
	英語				トマトチーズ	金箔パウダー
	接客の重要性				ハニー	緑茶のサービス
	呼び込み				さくらピンク	おばあちゃんがかわいい
	中国語				トッピング	芸術的美しさ
	同時の作業				ハート型星型	ポスター、旗
	素早い確認				チーズタッカルビ	サクサク、ふわふわ
	商品の補給				イチゴ&カスタード	
					黒蜜&クラッチ	
				柚子あげまんじゅう		
				映え		

図3 企業（浅草九重）訪問と仲見世フィールドリサーチ

1.5.4 成果

(1) 文化祭（藤華祭）での新商品販売

第1弾 藤華祭⇒2019年9月28日（土）29日（日）

あげまんじゅうアイスのせ ～あなたのために揚げるあげまんじゅう～

【売上】 1個販売価格 200円

1日目 30,000円（150食）

2日目 32,800円（164食）

総売り上げ62,800円（314食）

揚げ玉のサクサク感が美味しい！！ 1日に2個も食べました！！など大好評！！

※バターチキンカレーも同時に販売！！

【工夫】

①揚げ玉をトッピングとしてリユース

⇒食品ロス対応

②卵を使用しない衣を使用

⇒ベジタリアン対応

(2) 学校説明会（イブニング説明会）での発表 2019年11月18日（金）18:00～19:00
イブニング説明会をクッキング部でコーディネート。その中で「Cafe Chiyoda」オープン
をイメージし、手作りケーキ2種と紅茶のおもてなしを実施。又、浅草九重とのコラボに
ついて発表をしました。

(3) 保健所への衛生管理相談

11月14日（木）16:30～17:10 クッキング部 衛生管理担当3名 千代田保健所へ
本校担当の千代田保健所 生活衛生課 麹町地域食品衛生係の方より、説明を受ける。
今後、部員への詳細の説明を実施予定。

(4) 浅草九重 HP 英訳の作成

クッキング部部員が作成中

(5) 今後の予定

1月 新商品プレゼン、アンケート実施（対象：部員）

1月17日（金）他校との合同調理実習

MESE/Management&Economic Simulation Exercise 実施（ジュニアアチーブメン
トジャパン提供）

2月 第1回目「Cafe Chiyoda」開催、アンケート実施（対象：来校者）

3月 外部発表、振り返り、まとめ、来年度につなげる。

2. プロジェクト学習2「大学との連携」（荒木貴之）

2.1 テーマ

「みんなのメダルプロジェクト」

2.2 達成目標

SDGs12「つくる責任、つかう責任」

SDGs17「パートナーシップで目標を達成しよう」

2.3 テーマ設定の理由

武蔵野大学附属千代田高等学院は、国際教養人の育成を理念に掲げており、2020年に東京で開催されるオリンピック・パラリンピックへの具体的な協力として、携帯電話やパーソナル・コンピュータ（PC）などの小型家電の基盤から抽出される貴金属から、金銀銅のメダルを作成する「都

市鉦山プロジェクト」に賛同し、生徒・教職員だけでなく、広く地域や保護者にも呼びかけて、小型家電等の回収をすることとした。

2.4 運営体制

武蔵野大学工学部環境システム科 高橋和枝教授

武蔵野大学附属千代田高等学院生徒会

2.5 経過

メダルプロジェクトで回収された貴金属類のまとめを図4に示す。なお、オリンピック・パラリンピックの1個の金メダル制作に必要な金は6gとされており、メダルプロジェクトにより金メダル2個の制作が可能となった。

品目	重量(kg)	金(g)	銀(g)	銅(kg)
PC	230	9.6	41.7	6.2
携帯電話	10	3.3	10.3	1.0
デジタル小電	10	0.2	2.1	0.6
その他小電	80	0.6	10.2	3.5
合計	330	13.8	64.2	11.3

※品目別の重量、金・銀・銅の含有量は計測値ではなく概算値です。

図4 メダルプロジェクトで回収された貴金属類（千代田高等学院回収分）

3. プロジェクト学習3「生徒会主催事業」（林昂平）

3.1 テーマ

「ちよだSDGsプロジェクト」

3.2 達成目標

SDGs2「飢餓をゼロに」

SDGs14「海の豊かさを守ろう」

SDGs17「パートナーシップで目標を達成しよう」

3.3 テーマ設定の理由

2019年度の生徒会役員が考えるSDGs達成の課題として、認知度と自分たちの生活への関与の低さをあげている。

まず認知度の低さについてだが、2019年2月に朝日新聞社が行ったネット調査では、「SDGsという言葉聞いたことがあるか」という質問に対し、「ある」と答えた人は19%にとどまった。すなわち、未だ5人に1人はSDGsを聞いたことがないのだ。生徒会役員はSDGs達成の第一歩

としてSDGsの認知度の向上を考えた。

また生徒会内から、SDGsがどれほど自分たちの生活に関わっているのだろうか、という疑問が寄せられた。やはり生徒たちの中ではSDGsの理念がまず先にあり、具体的な行動にはつながっていないようだ。

したがって、今年度の生徒会の活動目標はSDGsの認知度の向上と活動を実践することにある。

3.4 運営体制

武蔵野大学附属千代田高等学院生徒会
生徒会顧問

3.5 経過

3.5.1 フードバンクプロジェクト

フードバンクとは、印字ミスなどで販売できない食品や家庭にある余剰食品を、必要としている人々に寄付する活動である。今回は「フードバンク調布」と連携し、活動を行った。

目的は以下の3点である。

- (1) 生徒・保護者・地域など、多くの方々が参加できるSDGs企画を実施すること。
- (2) SDGsについて学ぶだけでなく、貢献できる活動を行うこと。
- (3) 宗門校として食へのありがたみを再確認できる機会をつくること。

3.5.1.1 実施日

文化祭（藤華祭）2019年9月28日および29日

3.5.1.2 結果

生徒たちが予想したよりも多くの食品を回収することができた。生徒や保護者だけでなく、受験生や同窓生からも多くのご寄付をいただけてことが原因だと考えられる。まさに、千代田だからこそできた取り組みであった。

また今後も継続することができる持続的な活動であることがわかった。生徒会役員にとっては単発の活動で満足せず、持続的な活動こそがSDGsの達成には欠かせないと意識する機会となった。

3.5.2 千代田×JBIB ワークショップ

JBIB（企業と生物多様性イニシアティブ）とは生物多様性の保全を目指して積極的に行動する企業の集まりで、正会員が30社を超える団体である。ワークショップには、花王や富士通などといった企業が参加した。JBIBと生徒会が連携し、11月に本校にて海洋プラスチック問題について考えるワークショップを行った。

目的は以下の3点である。

- (1) 環境問題対策をリードしている企業から現実の状況を学び、SDGsの必要性をあらためて理解すること。
- (2) 環境問題に対する解決策を考案するだけでなく、企業に向けて発信すること。
- (3) SDGs達成のために欠かすことができないパートナーシップを学校外の人と築くこと。

3.5.2.1 実施日

2019年11月6日および11月16日

3.5.2.2 結果

SDGsの活動は一学校内で完結するものではない。一学校から社会へと活動する領域を拡大させていくことが肝心である。今回ワークショップが成功した理由は、社会に開かれたSDGs活動であるということを生徒たちが感じたからだろう。今後、SDGsに関する活動を行うとき重要な視点であると再認識した。

3.5.3 ペットボトルキャップ投票

ペットボトルキャップ回収ボックスを投票型にし、ペットボトルの蓋で掲示された質問に対する投票を行う。掲示する質問として、「ラグビーワールドカップで日本代表は決勝トーナメントに進出できるか」など、流行の話題を取り上げる。投票結果は他の高校とも共有を行い、投票に対しての意識を高める。

目的は以下の3点である。

- (1) ペットボトルと蓋の分別をしっかりと行うため。
- (2) 分別後の蓋を寄付するため。
- (3) 投票結果を学校外でも共有を行い、当活動を広めるため。

3.5.3.1 実施期間

2019年度第4ターム（2020年1月から3月）

3.5.4 千代田×SDGsハンドブック

本校では上記の取り組み以外にも、様々な活動を行ってきた。それらをSDGsの17個の項目ごとに整理したのが「千代田×SDGsハンドブック」である。生徒会役員が分担して執筆したハンドブックは文化祭（藤華祭）にて来場者に配布した。今後、学校外にSDGsの活動を広めていくために用いる。

4. 効果的なSDGs教育手法の開発（西田浩之）

SDGsが目指す「No one will be left behind（誰一人として取り残さない）」を学習者が体感する教育手法として、レゴ®シリアスプレイ®（以下、LSP®）を活用することとした。

4.1 レゴ®シリアスプレイ®とは何か

LSP®メソッドはグループのためのコミュニケーション、問題解決を促進するメソッドで、ファシリテーターによってガイドされる活動です。参加者はセッション進行とともにどんどん深くなっていく質問に導かれていきます。各参加者は、ファシリテーターの質問に応えながら特別に用意されたレゴブロックセットを使って3次元モデルを作ります。この3次元モデルがグループ討議、知識共有、問題解決を進める基礎となります。

LSP®は世界中で約3000名、日本国内では約170名存在する専門的なトレーニングを受けたファ

シリテーター（参考図書発行年時の情報）によって提供されています。過去10年以上にわたって、NASA, MIT メディアラボ, ポストンコンサルティング, Microsoft, Google, Yahoo! など多数の企業や官庁、大学が組織開発、人材開発目的のために導入しており、日本でもトヨタ自動車、博報堂など数多くの企業や、人事院、日本青年会議所や九州工業大学、グロービス経営大学院をはじめとする数多くの大学でも採用されています。

LSP[®]は専用のレゴブロックセットを用い、メソッドの訓練を受けたファシリテーターが、ワークショップを行いというもので、受講者は通常の会議の代わりにLSP[®]を活用した新しい会議（ワークショップ）に出席することで、これまでとは全く違う経験をすることが出来ます。具体的には以下に様な利点があります。

- (1) 無意識領域に閉じ込められた自分の想いを知ることが出来る。
- (2) 言葉だけでは表現できない自分の本当の考えを表現することが出来る。
- (3) (自分を含め) 出席者一人ひとりの大切にしている思いを知ることが出来る。
- (4) 出席者全員の思いを漏らさず拾い集めてチームのビジョンを創り上げることが出来る。
- (5) 出席者全員が会議で決められたことに心からコミットして行動に移すことが出来る。

LSP[®]では、手を使った創作（コンストラクショニズム *1）とフロー理論を基に、創作と対話を繰り返します。そうした中、組織、チームのための問題解決とコミュニケーション向上に高い効果を示す事が出来、一部の参加者が発言しないまま終わることのない、『無口な人を組織のヒーロー』に出来得るメリットがあります。また、言語だけでは表現できない本当の考えや、気持ちを参加者に促し、引き出していくことが可能になります。

*1 コンストラクショニズムとは、手と頭が連携を取りながら、新しい知識を構築、再構築していくという理論です。「何かをつくることで学ぶ」という考え方で世界中の学校教育や社会人教育に大きな影響を与えています。

4.2 ちよだSDGsプロジェクトにおけるLSP[®]の活用

前述の通り、LSP[®]ではSDGsの理念と同様に、「誰ひとり取り残さない」環境での対等な会話を実現する。個々が持つ価値観、想いをよりの確に表現することが可能にし、それを100対100の対話の中で表現していくことを可能として、集団の中で取り残される人を作り出さないこと、皆の意見を等しく尊重する環境、そして意識を作りだします。そうしたワークショップを通じて、生徒一人一人に、SDGsに関してのマインドセットの育成や再考を促していくことを、LSP[®]の活用によって目指していった。

意識の変化や、LSP[®]の有効について、高校生、もしくは大学生などを対象にしたワークショップの実施を通じて考察していく。今回は2つのワークショップの例を紹介する。

4.2.1 実施事例（1）

実施日：2019年7月23日 4,5限（10:35-12:15(100分)）

対象：10AB HL生徒23名（4人×6テーブル）

授業単元：SDGsの目指す世界観の共有

内容・目標：

- ・SDGsの最終目標である“誰一人取り残さない世界”を共有する
- ・2030年度の世界をイメージすることで、それぞれの考えている“誰ひとり取り残さない”の視点の違いについて気付く
- ・互いの認識の違い、想いの違いを超えた先の世界の実現の可能性について考える

*SDGs に関するイメージは授業を通じて変化しましたか？

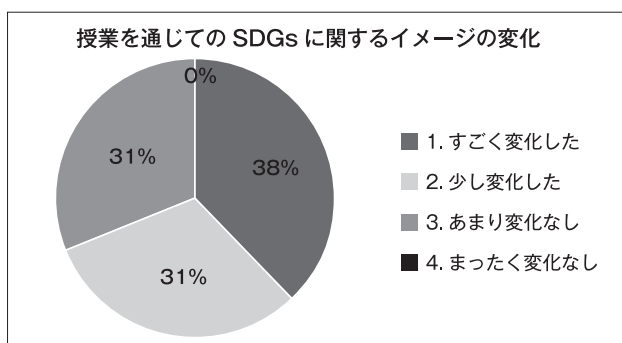


図5 SDGsに関するイメージの変容（高校生）

4.2.2 実施事例（2）

実施日：2019年8月31日 13:00-15:30 150分

対象：武蔵野大学教育学部3年生18名（3人×6テーブル）

授業概要：LEGO® SIRIOUSPLAY® を実体験することで構築主義（コンストラクショナリズム）を理解する

SDGsの目指す世界観の共有

内容・目標：

- ・SDGsの最終目標である“誰一人取り残さない世界”を共有する
- ・2030年度の世界をイメージすることで、それぞれの考えている“誰ひとり取り残さない”の視点の違いについて気付く
- ・互いの認識の違い、想いの違いを超えた先の世界の実現の可能性について考える

*SDGs に関するイメージは授業を通じて変化しましたか？

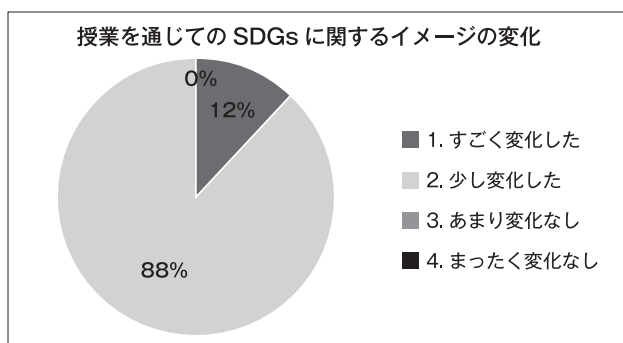


図6 SDGsに関するイメージの変容（大学生）

4.3 考察

LSP[®]を用いる事で、SDGsの世界をより自分事として捉えることが出来た学生が多くいた。抽象的な概念であるSDGsのゴールを、自由な発想でイメージを膨らませ、手を使って具現化する過程、またそれを否定されない、安心安全な場で共有し、互いに振り返ることで、SDGsに関してより具体的なイメージを持つことが出来たのではないだろうか。

SDGsに関しては、言語によって語るだけでは、どうしても自分の固定観点から脱することが難しいと考えている。LSP[®]の特徴である、100-100の対話や、手の力の理論を基に、そうした固定観点から脱却し、一人一人の真の想いに近づくこと、個々の洞察を深めることが可能であり、その可能性の大きさを感じている。

今後は、対象を広げて今後も継続的に実施していくことと、一度ワークショップを実施したクラスに違う形のワークショップを継続して行っていく。また、SDGsの教育を行っていく教師集団に対するワークショップの企画検討していきたい。

5. まとめ

本稿では、SDGs4.7の観点から、武蔵野大学附属千代田高等学院で取り組まれているSDGsに関連したプロジェクト学習ならびに効果的な教育手法の開発について取りまとめた。終章では、これらのSDGs実践を通じた人材育成に関して、考察を加えることとする。なお、ここでいう人材育成とは、SDGs4.7で示されている「2030年までに、持続可能な開発のための教育及び持続可能なライフスタイル、人権、男女の平等、平和及び非暴力的文化の推進、グローバル・シチズンシップ、文化多様性と文化の持続可能な開発への貢献の理解の教育を通して、全ての学習者が、持続可能な開発を促進するために必要な知識及び技能を習得できるようにする。」ことにほかならない。

まず、必要な知識としては、SDGsへの理解があげられる。第3章「プロジェクト学習3生徒会主催事業」では、生徒のSDGsへの理解が十分ではなく、そのことに対して生徒会によるSDGsパンフレットの作成などの事例が紹介された。筆者が担当する教育学部1年生「教育原理」授業においても、学校法人武蔵野大学が発行する「武蔵野ジャーナル」(2019年9月号)を取り上げ、「武蔵野大学SDGs宣言」などの取り組みを紹介したが、受講した教育学部の学生の感想としては、

「日本の多くの教育現場ではこの言葉ができていないように思えます。そのためこの言葉を聞いてとても感銘を受け、どうしたらその様なことができるのか興味を持ちました。」というものがあつた。大学生でさえも、SDGs という名称は知っているものの、具体的な行動やスキルといったレベルの理解と習得には至っていないのが現状と推察される。

小村・金井(2018)は、OECD Education 2030 を例に挙げ、OECD Education 2030 では、不確実性を増していく現代社会の中で「個人およびすべての人々がよりよい未来を創造する(Well-being)」ために、エージェンシー(Agency)の育成の重要性を指摘している。エージェンシーとは、よりよい未来を創造するために責任感を持って社会参画をしていくことを意味する。そして、生徒がエージェンシーを発揮していくためには、家族や友人、教員や地域社会等、生徒をとりまく人たちとの互恵的な協力関係としての「共同エージェンシー」を発揮することが重要であると指摘している。

OECD が実施する PISA では、CPS (Collaborative Problem Solving ; 協働的課題解決) 能力についての出題がなされている。学校が、地域や学校外の教育資源と連携し、意図的に計画的に教育活動で SDGs に取り組むことは、生徒の CPS 能力を高めるとともに、社会に貢献しようとする「共同エージェンシー」を育むことにつながると思われる。

謝辞

浅草九重の小林久美子氏には、武蔵野大学附属千代田高等学院クッキング部との協働について、多大なるご支援をいただきました。ここに感謝申し上げます。

本研究は、武蔵野大学令和元年度しあわせ研究費特色研究「ちよだ SDGs プロジェクト」の支援を受けた。

参考文献

- 小村俊平・金井達亮(2018) これからの教育と SDGs—生徒がエージェンシーを発揮する学びとは、学術の動向, 2018(8), pp.38-43
- 武蔵野大学(2019) 武蔵野ジャーナル, 28, 武蔵野大学
- ロバート＝ラスムセン(著), 蓮沼孝・石原正雄(編)(2016) 戦略を形にする思考術レゴ® シリアスプレイ® で組織はよみがえる, 徳間書店, 東京